

---

# **雪と死に神**

エバンス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪と死に神

### 【Zコード】

Z6337F

### 【作者名】

エバンス

### 【あらすじ】

朝、起きると雪が積もっていた。寝た後から降り出し、起きる前に止んだらしい。いつもの窓から、いつもと違う風景を眺めた。アパートの前に広がる道路、小さな公園、近所のパン屋の看板。雪がすべてを白く染めていた。雪が積もっているというよりは、白いコートを身に纏つていていた。僕は着替えてアパートの外に出た。雪があまりにもきれいだったからだ。吐く息が白い。吐いた息は、少し戸惑い空に消えた。空にはまだ太陽はなく、くすんだ青色をしていた。マフラーを耳までひっぱりあげて、アパートの階段を

降りた。カンカンという音が鳴りすぐにきえた。雪が音を吸収しているからなのかもしれない。

## 雪と死に神

朝、起きると雪が積もっていた。

寝た後から降り出し、起きる前に止んだらしい。

いつもの窓から、いつもと違う風景を眺めた。アパートの前に広がる道路、小さな公園、近所のパン屋の看板。雪がすべてを白く染めていた。雪が積もっているというよりは、白いコートを身に纏つているようだつた。

僕は着替えてアパートの外に出た。雪があまりにもきれいだったからだ。

吐く息が白い。吐いた息は、少し戸惑い空に消えた。空にはまだ太陽はなく、くすんだ青色をしていた。

マフラーを耳までひっぱりあげて、アパートの階段を降りた。カシカンという音が鳴りすぐにきた。雪が音を吸収しているからなのかもしれない。

誰の足跡もない雪の絨毯。足を下ろす度にサツサツと、シャーベットをくずす時のような音がした。

粉砂糖のような雪だつた。両手ですくつてみると、サラサラと指の間からこぼれおちた。何度かそれをくりかえした後、息を思いつきり吸つてみた。

鋭く、冷たい空気が肺に満ちる。細胞の一つ一つが、ぴしひしと音をたてて目覚めていくような気がした。

さて、少し散歩でもするかな。と僕は思った。幸い今日は日曜日で昼まで予定はない。彼女のいない大学一年生にはまず悪くないアイディアだと思った。

少しうらぶらしてから、近所の公園へ行った。子供の姿のない公園は、主を待つ犬のように寂しそうだった。

すべり台、ブランコ、シーソー。すべてが雪を纏い、その姿を大きくしていた。僕はそんなところにいると、ひどく落ち着かない気持ちになつた。巨人の国に迷い込んだ小人。そんな感じだ。

なるべく雪の積もつてないベンチを見つけ、腰をおろした。タバコを吸おうとして、自分が震えていることに気づいた。寒いからではない。魂が体から脱け出そうとしている、あるいは、体が魂をお追い出そうとしているのだ。いやそのどちらでもないかもしない。ただ一つ確実なことは僕が、僕であることを拒否しているという事だけだ。

よくある事だ。中学生の時から始まり、その時は半年に一度程度だったのがどんどんひどくなり、今では一週間に一度のペースでやつて来る。僕の根底にあるものを搖るがす激しい震え。

瞳を閉じ、自分の心と向かい合つ。深く、深く、自分の心の底まで潜つていぐ。どんな色なのか、どんな形なのかさえ分からぬ魂に触れてみる。生まれたての赤ん坊に触れるようにそつと。ただ、そこにあることを確かめるだけのために。

次はそれを囮む。誰も入つて来れないよう。魂が傷つかないよう。高く、厚く、黒い壁で。

この作業はちょうど、面白味のない自己紹介のようなものだ。  
A型です。好きなスポーツはサッカーです。嫌いな食べ物はチーズです。・・・・・

主觀性はいらない。必要なのは客觀性だけだ。自分は周りから見て、どんな人間なのか、どんな人間ではないといけないのか。自分のフィルターを通さずに認識する。

次に、それを固める。ペタペタと何度も、何度も。崩れないようにな、壊れないように。自分が消えてしまわないように。

中学一年生の時から僕はいつもやつて生きてきた。十年間ずっとだ。

気がつくと。僕の隣に少女が座つていた。自分でも驚くくらい驚かなかつた。まだ少し混乱しているのかもしれない。

まだ中学生だろう。髪は不自然なほど黒く、長い。鼻筋はスーと通り、唇は今出来たばかりのようにつややかだった。瞳は受ける光によつてその色を変えているように見えた。

美しく、それ以上に儂かつた。まばたきをしている間に、雪に溶けてしまいそうなほどだった。

彼女は前の方をじつと見ていた。まるで雪の上に何か僕の見えない物が見えているようだった。

風も、鳥も、ブランコも彼女のために息を潜めているように思えた。

何かきつかけが欲しくて、咳払いをしてみたがその音は驚くほどひびかなかつた。

「ねえ。」彼女は姿勢を崩さずに言つた。

「こんな所で何してるの？」

高くもなく、低くもない声。トーンと胸に届く。

「別に、ちょっとと考え事をしていただけだよ。」本当の事ではないが嘘も言つてない。

「嘘

「嘘つて？」

「あなたは嘘をついてるつてこと。」

なんだか、それは僕には死の宣告のよつとも聞こえた。

「なんでそんな事が分かるんだわ~」出来るだけやさしく言つてみた。

「なんとなく。私には分かるの。」まだ前方を見つめている。

「そう。ならそつなのかもしね。」

彼女は不思議そつにこちらを見つめた。初めて彼女がみせた表情らしい表情だった。

視線がぶつかり、ゆれて、きえた。

彼女の瞳は雪解け水のよう、透き通っていた。その瞳はまるのも全てを水面に映すのだろう。

僕はなんだか、落ち着かない気持ちになつた。こころがザワザワ

と音をたてているような気がした。

「じゃあ。」と僕は言つて公園の出口に向かつて歩き出した。振りかえる事はしなかつた。振りかえると、彼女が消えているような気がしたからだ。

家に帰ると、シャワーを浴びて、そのままベットに飛び込んだ。体がまだ、ガチガチと震えていた。僕は自分の体を自分で抱きしめた。そうしてゐる内に急に眠りに落ちた。意識の束が斧でバチンと切斷されたみたいだった。

夢の中で、僕は工場で働いていた。全般的に灰色をした工場で、広さは高校の体育館ぐらいあつた。僕はベルトコンベアを流れる人間の頭に髪の毛を装着していた。

ここは死に神を作る工場だ。死に神というと、人間の骸骨で鎌を持ち、黒いマントを羽織つてゐる、というイメージがあるがそれは間違いだ。そんな死に神なら歩いてイルだけで、目立つてしまつて、人の命を奪うどころではないだろう。実際は本物の人間に限りなく近い。まあ、僕達がそう作つてゐただが。それが会社からの命令なのだからしようがない。

しばらくその作業を続けてゐると、昼休みを告げるベルが鳴つた。僕は先輩の五十嵐さんと昼食を食べに行つた。いつもなら、工場の中庭で弁当を食べるのだが、五十嵐さんが奢つてくれると言つので、着いて行つた。

なかなか良い雰囲気のレストランだつた。心地よい音楽が人の会話を邪魔しない程度に流れっていた。

「おう、何にする?」と五十嵐さんが言つた。

「じゃあ、僕はシンパシーの雪和えで。」僕がそう言つと、五十嵐さんは満足そうに笑い、

「おう、お皿が高いねえ。ここは生きの良いシンパシーで有名なんだ。」と言つた。

「なんですか。今では国産物のシンパシーは高いですからね。

「

「おう、そうだな。じゃあ、俺は構造主義のお造りで。おばちやん頼むよ。冷えたコンプライアンスを一つ付けてね。」と五十嵐さんが大声で言つた、店の奥から

「あいよ！」と威勢の良い声が聞こえた。

「先輩、良いんですか、コンプライアンスは会社で禁止されているんじや。」

「おう、良いんだよ。死に神作りなんてショッペ仕事の飲まなきややつてられるか。」おう、というのは五十嵐さんの口癖だ。五十嵐さんが居るところからほどこでも、おう、おう、と聞こえてくる。

食事が運ばれてきた。確かに冷えたコンプライアンスは絶品だったが、すこし頭の奥がカチカチと点滅している気分になった。午後からの仕事に支障が出ないか、心配だつた。

「あのー、先輩一つ聞いても良いですかね。」

「おう、なんだ、俺にドンと聞いてみる。」と言い実際に胸をドンと叩いた。五十嵐さんはなんと言つたか、そういう人間なのだ。

「何で、僕達は死に神なんか作つてんでしょうか？もしかしたら自分の命を奪いに来るかもしれないんですよ。」

「おう、お前も、もうそんな時期か。」

「そんあんな時期あるんですか？」

「おう、ある。ない？いや、ある。その時期を越えればお前も一人前の死に神作りになれる。でも、その時期にやめる根性無しもいつけい、いる。さあ、お前はどうちかな！」と言つて五十嵐さんはガハハと豪快に笑つた。

五十嵐さんはその笑いで、僕の相談事が吹き飛んだと思っているようだ。その後はいつもみたいに、あしかについての話になつた。五十嵐さんはなんと言つたつてあしかに目がないのだ。

午後からは液体付けにされた、指を一本一本、手にはめていく仕事だつた。液体の匂いがきつくて、気持ち悪くなつたが何とかやり

遂げた。

仕事終わりに、同僚からアドミニースレ ターを見に行かないか誘われたが、断つた。いつまで経っても慣れない仕事に少しうんざりしていた。安アパートに着くと、熱い風呂に入つて、冷たいビールを飲み、買ったばかりの本を読んだ。

椅子に座つたまま、うつらうつらしていると、ドアをドンドンと叩く音がした。ドアを開けると、金髪のショートヘアの美しい女性が立つていた。

「死に神です。」とその女性は言つた。気絶なりそうな程、甘い声だつた。彼女が僕の頬に触れた。すると、僕の意識はするすると抜けていった。

頭の奥で、バチという音がして目が覚めた。時計を見ると、もう昼前だつた。僕は驚いた。眠っていた感触は全くなかつた。まるで一瞬の内にタイムスリップしたような奇妙な気持ちだつた。

昼からは家庭教師をする予定の家に挨拶に行かなければならなかつた。初めは家庭教師を派遣する会社に入つていたのだが、浪費する時間の割りに給料が少ないので、やめた。幸いな事に教えるのは上手い方だつたのですぐに固定客がついた。それに主婦の間で評判が広まつたのか、仕事は尽きる事がなかつた。

今日の昼に訪れる家は家庭教師が初めてなので、会社の宣伝文句より、主婦間の情報網を信じ、僕を選んでくれたらしい。親に気に入つてもらう為のポイントはいくつかあるが、僕が一貫して貫いている姿勢はただ一つだ。それは僕が親なら、どんな家庭教師に来て欲しいのかを考えるのだ。そして出来るだけ具体的なイメージにしそれを出来るだけ忠実に再現するのだ。

僕は清潔な服を着て、家を出た。訪れる予定の家はそんなに遠くはない。まだ昼ご飯を食べていなかつたが、時間に遅れて印象を悪くするよりはましだ。

電車をいくつか乗り継いで、予定の家まで行つた。なかなか大き

な家で少し緊張した。嫌味じやないぐらいに西洋風でセンスが良いな、と感じた。ふーと深呼吸をしてインターホンを鳴らす。はい、

と言ひ声がして玄関の扉が開いた。もちろん引き戸じゃない。

綺麗な人だな、というのが最初に感じた事だった。でも、その後に何故か違和感を覚えた。それが何かは分からなかつた。

「あの、家庭教師で来ました。」と言い名前を名乗り、名刺を差し出した。名刺はフリーになつてから、作つた。形だけのものだが、相手を安心させる効果はある。

「あ、そうだつたわね。今日だつたかしら。」と独り言を言つていたが、僕が不思議そうな目で見ているのに気付いたのか

「あ、ごめんなさい、どうぞ上がって。」とスリッパを差し出した。

「おじゃまします。」と僕は言いスリッパを履いて、リビングに案内された、テーブルに座つた。リビングは広く、片付いていた。いささか、片づけられ過ぎていた。そこで僕は前に感じた違和感の正体が分かつた。生活観が無さ過ぎるのだ。僕の目の前でお茶を入れようとしてくれている彼女もエプロンは着けてないし、まるでこれから外出するような格好をしていた。もしかしたら、父親がいないのかな、と思つたが口には出さなかつた。僕が詮索する問題じゃない。僕はただの家庭教師だ。

お茶を飲みながら、仕事の話をした。お金の話や、僕が教える事の出来る教科の種類、レベル、それに子守りの仕事はやつてないという事も話した。他の家庭と違い、こここの母親は聞き分けが良かつた。というより、ほとんど話を聞いてないようだつた。

僕の話が終わつてからも、彼女は何故かボーッとしていた。

「あの、それで僕の教えるお子さんは。」と僕が言ひつと、初めて氣付いたように

「あ、ごめんなさい、すぐに読んでくるわね。」と言い、ドタバタと二階に上がつていった。僕の経験上、子供に無関心な親の子供は、大体において、生意氣で、自分は大人だと思っており、扱いに

くかった。

階段を降りてくる音が聞こえて、そちらに目を向けると、親の後ろに少女が立っていた。その少女を見た瞬間、僕は言葉を失った。その子が今朝会った女の子だったからだ。でも、今朝ほどの優しさも、美しさも、この家では影を潜めているように見えた。僕がこんなに驚いているのに、彼女は表情一つ動かさなかつた。彼女は僕の事なんて覚えてないかもしれない。

「ほら、挨拶しなさい。」と母親が言つて、娘は「斎藤ユキです。」と言つた。表情は全く変わらなかつたが、声には精一杯の氣だるさが込められていた。

「ようしきね、ユキちゃん。」と僕は言つた。

ユキは僕の顔をじーっと凝視した後

「あんまカッコ良くないね、今回は。」と言つた。興味は無いんだけど、と言つ風な感じだつた。

今回は?と僕は思つた。家庭教師を雇うのは初めてだと聞いていたが。

「あ、やだあ、違つわよ、ユキちゃん。この人は私の彼氏じゃないわ。ただの家庭教師よ。」と母親は友達に言つかのような口振りだつた。

「そうなの。私にとつては関係無いけじ。」とユキは言つた。

僕は親子の前で絶句していた。色々な親子をしてきたつもりだが、こんなに子どもに対する影響を考えない親も、これほど無関心な子供もはじめて見た。さすがの営業スマイルも崩れそうだつた。

「そうだよ、僕はただの家庭教師だよ。」とかろうじて言つたが、誰も聞いてなかつた。

「そうだ、先生、昼食は食べましたか。」と母親が言つた。

「いえ、食べてません。」と僕は言つた。何かを「」と馳走してくれるのである。

「じゃあ、ユキと何処かで食べてくれませんか。先生なら安心ですもの。私、今からちょっと出かけなければいけなくて。」

「あの、ちょっと。」子守りはしないつて言わなかつた、俺。

「大丈夫ですよ、お金は出しますから。ねえ、ユキ良いでしょ。」

「良いけど。」とユキは言った。こういう状況に慣れているのか、

なんだかあきらめている様子だった。

「じゃあ、先生これでお願いしますわ。」と言つて一万円と鍵を僕に渡してきた。

「鍵はしつかりとかけてくださいね。お釣りはもうつて結構ですよ。」と言い、ユキの頬にキスをして

「じゃあ、行つてくるわね。」と言つて出かけて行つた。あの慌てぶりだと、最初から僕をあてにしていたのだろう。

「今日はいつも来ている家政婦さんが居ないから。」ユキが独り言のように言つた。

お母さんは何の仕事をしてるの、お父さんはいないの、一人でいる時間は長いの、あれこれと質問が浮かんだが、言わなかつた。といふか言えなかつた。ユキの凛々しいともいえる顔を見ていると、そういう質問をするのが失礼だと思った。

「じゃあ、飯でも食いに行くか。」と僕が言つと、ユキは返事もしないでついてきた。

これから数時間の間、この子と二人きりか、と思つと気が重くなつた。玄関を開け、雪で真っ白になつてゐる道路を見た瞬間、意識が薄れ、不吉なイメージが浮かんできた。

視界がだんだんと開けてきた。暗闇がひび割れ、光が射し込んでくる。意識が戻つて初めて見えるのが死に神だとは、僕はついていない。

金髪の死に神はベットに寝転んでいる僕の脇に立つていて。その目からは、何の感情も伝わつてこなかつた

「何故だ。」と僕は言つた。

何を言つているの、と言つ風に死に神は首を傾げて見せた。作り物の髪の毛が揺れる。

「寝ている隙に、僕の命を奪つ事も出来るだろ。」死に神は一瞬で、人間の命を奪う事が出来る。掃除機でゴミを吸うみたいに。その事は死に神を作っている僕が一番知っている。

「ただ命を奪うだけなら、死に神じゃなくても出来ますよ。」と言つて死に神は笑つた。その笑顔は死に神である事も考慮しても、素敵だった。

「どういうことだ。」と僕は言つた。体がまだ重く、だるかった。

「私達、死に神は何故人間の命を奪うと思いますか。」

「知るかよ、僕は死に神じゃないからね。」

「考えた事も無いでしょうに。」

「まあ。そうかもしない。」実際こうやって死に神を本当に目にするまで、どこか性質の悪い冗談かもしない、という思いがどこか心の中にはあった。

「私達は、人間になりたいんです。それも素晴らしい人間にな。考えててもみてください。人間は良くなろうとしていますか。ただ、怠惰にこの世に存在してるだけじゃないですか。その点、私達、死に神は違います。私達はそのために、人間の命を奪つているんです。」抑揚の無い声で死に神が言つた。その声は僕に届いていたが、その声をすぐに意味あるものへ転換する事が出来なかつた。

「人を殺したものが、素晴らしい人間になれるものかな。」と僕は言つた。

「可笑しな事を言いますね。人間なんて、見知らぬ土地の為に同種族内での大量殺人を犯す唯一の動物ですよ。それと比べれば、人間になるために人間を殺す、なんて可愛いもんじゃありませんか。」

「それなら、さっさとしろよ。」これ以上死に神なんかと喋つてられるか。

「まあ、そう焦らずに。絶対に命は奪いますから。でも、その前に質問させてください。」

「質問? 何だそれは。」

「人間を知るためですよ。良く考えて答えてくださいね。」

「ああ、分かつたよ。」

「私とした事が大切な事を忘れていたわ。」と死に神がわざとらしく言った。

「あなたが死ぬのはあちらのあなたが死んだ後です。」

「あちらのあなた？ 何を言つているんだ、こいつは。」と僕は思つた。

「じゃあ、行つてらっしゃい。」と死に神が言い、僕の唇にキスをした。僕の意識は暗闇にすりつと消えていった。

遠くからが声がしていた。とても小さく、綺麗な声だった。まるで世界の果てから、硝子が鳴いてくるような声だった。そんな声を聞いていると、徐々に頭が冴えてきた。

「ちよつと、どうしたのよ。急にしゃがみ込んじゃうなんて。」

ユキの声は怒つているようにも、心配しているようにも、聞こえた。

「いや、何でも無いよ、大丈夫。」朝と同じだ、と僕は思つた。でもその時より意識を失つていた時間は短いようだ。なんだか頭の奥に凝縮されたイメージが残つてるような気がした。

ユキが不安そうに僕を見上げていた。そんな風にしていると、子供だな、なんて今更実感した。

「本当に大丈夫だから、じゃあ、美味しいもんでも食ひに行こい。」ユキは頷き歩き出した。雪に彩られた道路を歩いていると、ユキは、風や、空氣、を従えた女王様みたいに見えた。僕がその事を言つと、黙殺された。

「ねえ、僕はここら辺の事、良くわかんないからさ。なんか美味しいところ、知らないかな。」と僕は言つた。

「いつもそうなの。」とユキは言つた。

「えつ。」と僕は聞き返した。

「彼女とデートする時も彼女に聞くの。」

「うん、そっちの方が多いと思うけどな。」  
はあ、あきれたという風にユキはため息をついた。

「何だよ。」と僕は聞いた。少し傷ついた。普通の子供なら聞き

流すところだが、ユキの場合はなんだか、洗礼された女性のようなところがあるので、ついむきになってしまつ。

「別に、何でも無い。少し歩いたところこいつも行く所があるのであるから。そこで良い。」

「君に任せゆよ。」と僕は言つた。下手に逆ひりひと、大変な事になりそうだった。

ユキの連れていってくれた所は、高そうなフレンチレストランだった。不安そうにしている僕を見かねたのか

「大丈夫よ。一万円で充分足りるわ。」と言つた。

「そう・・・なんだ。」なんだか負けた気がした。

ユキは大丈夫と云つたが、僕はまだ不安だったので、3000円のランチセットにした。

「同じもので良いわ。」とユキも言つた。僕に気を遣つてくれたのだろうか。

「ねえ、私の話を聞いてくれる。」食事が運ばれてくるのを待つてゐる間、ユキが不意に言つた。磨かれた凍りのように透き通つた瞳に見つめられて僕の嶺がうずいた。

「ああ、良いよ。」と僕は言つた。いくらか声が緊張している気もした。

「私は死に神なの。」とユキは言つた。

僕は声を失つた。何を言つてゐるんだい、と笑おうとしたが笑えなかつた。やつぱり、そうかと思う気持ちも少なからずあつた。その思いは朝に出会つた時から僕の胸でくすぐついていた。

「やつぱり、氣付いていたのね。」とユキは言つた。

「ああ、じゃあ、朝は僕を狙つてたのか？」と僕は言つた。周りの人達に僕らはどのように見えているのだろう。兄弟だろうか。歳の近い友達だろうか。少なくとも死に神とその獲物には見えないだろ。う。

「そうよ、あなたは随分と弱つてゐみたいだつたからね。」ユキの声にはもう、血が通つてなかつた。

「何の為に、いや、どうして僕なんだ。死に神なんてこの世に存在するのか。」僕は動搖していた。目の前の子が死に神なんて。でもそれほど彼女は非現実的に、儂く、綺麗だった。

「あれこれ言わないでくれる、私、静かに食事したいタイプだから。」とユキは言い、僕の目を覗きこんだ。

その瞳には僕が映っていた。彼女の瞳の湖の中に僕はいた、体の力が抜けてきた。まるで、水の中に漂っている気分だつた。不思議と怖くは無かつた。先ほどまでの動搖は消え去つていた。そして僕の意識は湖の底に沈んでいった。

「質問。」と死に神が言つた。

その声で僕は現実に引き戻された。いや、ここは本当に現実なんか。僕は、僕が存在するこの世界の事も信じられなくなつていた。

「聞いてる、質問するわよ。」

「ああ。」と僕は言つた。舌が上手く回らなくなつていていた。

「死刑制度には賛成ですか。それとも反対ですか。」死に神はまるでクイズ番組の司会者のように言つた。

「理不尽な質問だな。」僕はほとんどつぶやくようにしか言えなかつた。

「答えてください。」

「基本的には反対だ。」

「どうしてですか。」

僕は確実に鈍くなつていく頭をフル回転させて、考えをまとめた。これが僕の最後の言葉になるかもしれないのだ。

「まず、国家に国民を殺す権利があるのかどうかが疑問だ。それに裁判官の人間性や器量に差があつて、平等じゃない。他にもいくつかあるけど、それが基本の僕の意見だ。」

「そうですか。参考にさせていただきます。」死に神は僕の顔を掴み、僕の瞳を覗きこんだ。心に暗闇が広がつていくを感じた。

「でも、最後に言わせてもらいますが、死に神がもたらす死は平

等ですよ。」

そうして僕達は死んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6337f/>

---

雪と死に神

2010年12月14日17時45分発行